

『満濟准后日記』

応永十八年以前考

1

『満濟准后日記』の次の箇所に注目したい。將軍が満濟をどのように処遇していたのか、当時の様子が窺われる一行である。

(略) 就宝鏡寺地事被仰管領子細在之、山門事等為申可有來臨之由申遣了、管領來之間兩條申了(略)(永享五年八月二十九日条)

右の記述について大略説明すると次のようになる。満濟のところへ室町殿(義教)より仰せがあった。宝鏡寺地のことについて管領に子細を聞きたいという。また、山門のことについても伝えたいことがあるので來臨してほしいと、管領に使いを遣ったところ、(早速)やって來たので、前記二つのことを満濟から申伝えたとしたのである。

簡単に記された一行であるが、満済の立場を理解する上に十分な書き様である。

ここでは法身院（満済）へ管領細川持之の来臨を要請している様子が窺え、この記述から満済が將軍の仰せを取次ぎ管領に口頭で伝達しているのがわかる。幕府の政務機関中、トップに位置する管領に將軍の意向を満済が伝える、こういつた様子は日記の処々に知見される。つまり、將軍と直接対話しているのは、管領ではなく僧侶の満済である。この状況は、明らかに内々の儀における「黒衣の宰相」である。¹⁹

満済は、義満・義持・義教の三代の將軍に仕え、どの治世においても拔群の信頼を得た人物だが、他にも有能な朋輩が出仕する中であつて、なぜ、彼にのみ、生涯そのような人生が用意されたのだろうか。その客観的理由の一つに彼が二条家庶流の出であつたことがあげられよう。

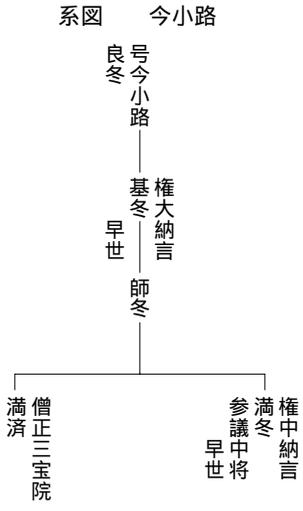
抑々、満済を最初に見出したのは義満である。義満自身は、誕生の瞬間より將軍位が約束された人物であり、その政権は公家社会への君臨をもめざすものであつた。それ故に、当時最高の文化人と称された二条良基に師事し、故実の世界に自分を正確に位置付ける努力をした。その結果、この武家の棟梁は、かつて前例を見ないほどの官位を進め、廷臣らの上に君臨することに成功したのである。若い義満がここまで強力に足利政権の伸長を推進めることができた背後には、室町幕府を支えていた当時の幕府首脳陣に、強い將軍の登場を願う気運があつたことが伺えるが、同時に、公家側にも同様な動きがあつたことが考えられる。將軍義満の公家化を支援したのは、朝廷側の重鎮二条良基に他ならない。

ところで、満済の生家「今小路家」は、撰家二条家に繋がる家系である。満済のアイデンティティの中で、この点は何よりも義満を満足させるものであつたろう。管見の限りで、満済の生家「今小路家」の系図を作成すると後述の「系図」のようになる。『尊卑分脈』等先行の系図や文献²⁰とは多少異なるので、これに説明を加えたい。最初に「今小路」と号したのは、二条良基の伯父良冬である。良冬は歌会等²¹で良基と同席し知己を得、さらに、良基が閑白の任にある時期に、権大納言に昇進しているなど、両者の交流は深かつたと思われる。

「今小路」は、その邸宅が存在していたところの地名と思われ、京都上京区辺りに⁽⁴⁾もとめるのが妥当と推定した。この家の官途は権大納言・権中納言で、「冬」が通字になっている。良冬を初代として、基冬・師冬・満冬・持冬・成冬と六代までわかっているが、管見の限り、嫡子以外の男子はすべて僧籍に入っている。

ところで、『満済准后日記』や『大日本史料』七巻によると、満済の実父は基冬で、実母は出雲路殿になる。しかし、不思議なのは、『尊卑分脈』⁽⁵⁾にある記載である(系図)。満済は、師冬息となっている。この『尊卑分脈』は、周知のごとく洞院公定によって、永和二年(一三七六)に編まれたもので、満済の誕生はこれより後になるから、公定作成の原本には、満済の記載はなかったことになる。

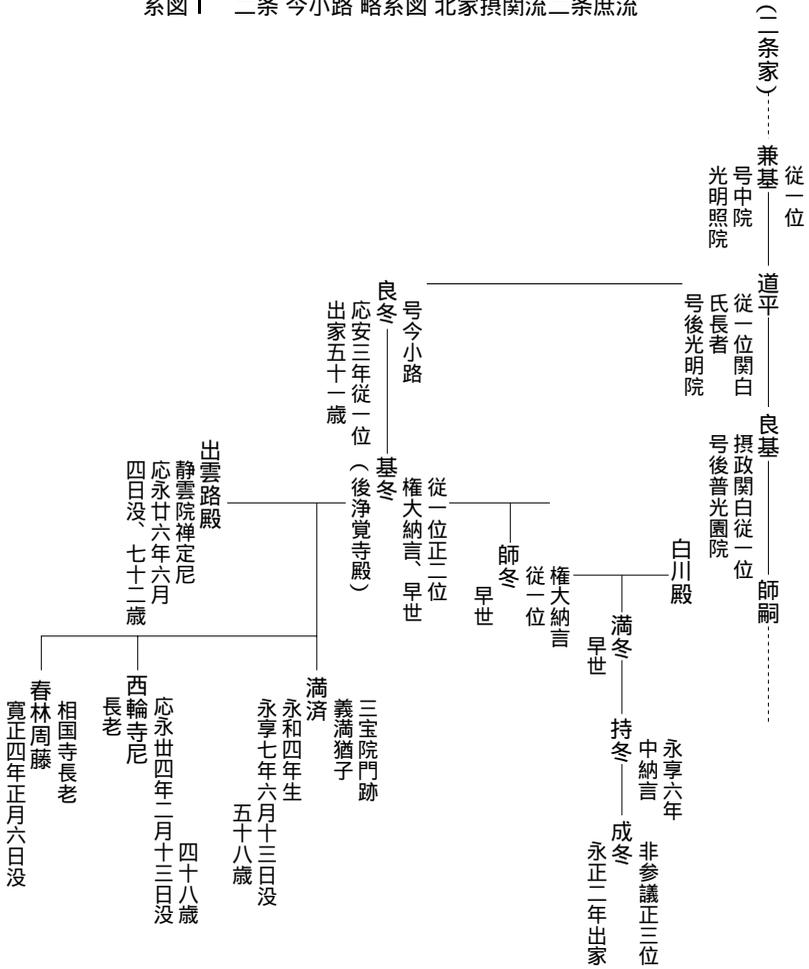
公定没後は、甘露寺親長、三條西実隆、中御門宣胤らによって増補、書写され今に至ったとされるが、ここに大きな疑問点が残る。つまり、満済死後、幾許もない時期に補填されたと考えられるにもかかわらず、なぜ、日記の事実と『尊卑分脈』の記載は異なっているのだろうか。特に編者の一人甘露寺親長は、同じ頃に書かれた『看聞御記』中にも登場する人物であり、満済生前の威勢を伝聞していたと思われるが、敢えて師冬息としたのは、それなりの理由があつてのことと推察される。



実父基冬が満済六歳の時没し、幼少のため兄に育てられたとする説もあるが、実母は生存していたし、妹もいたことなどから推して、この系図には意図的なものを感じる。案ずるに、義満・良基・満済ら三者の関係の中から考えるのが妥当と思われる。

さらに、満済が義満の目に留まったのは、義満室業子に伺候していた師冬室白川殿の影響が大きかったと思われる。白川殿は聖護院坊官源意の女である。この一流は藤姓魚名流源基を祖とし「号今大路」とある。この家の系図中、白川殿の説明が圧倒的に

系圖 I 二条 今小路 略系圖 北家撰閑流二条庶流



「系圖」付記

二条良基 「文和三年閏白從一位二条良基三十五歳」(『公卿補任』)

「嘉慶二年六月十三日卯刻薨六十九歳 翌十四日葬送嵯峨中院 土葬」(『諸家伝』)

今小路良冬 「文和三年、権大納言從二位三十五歳」(『公卿補任』)とあるから、良基と良冬は同年齢になる。

応安三年六月從一位、出家五十一歳。

今小路基冬 「永徳二年十一月廿二日没四十二歳」(『公卿補任』)、満濟六歳の時死別。

今小路師冬 満冬、満濟の父として記載されている(『尊卑文脈』)

今小路満冬 從二位権中納言、參議中将、早世(『尊卑文脈』)。「今小路宰相中将満冬」とある(『看聞日記』)

「別記行幸事」。

今小路持冬 永享四年非參議從三位、同八年薨権中納言從三位(『公卿補任』)、正長二年から永享六年にかけての持冬書狀断簡あり(『醍醐寺文書別集』一―三)。

出雲路殿入滅申末刻春秋七十二歳(『常樂記』、『満濟准后日記』 応永二十六年六月四日条)生前

は「出雲路殿」、没後は「静雲院」として日記に記載されている。

西輪寺尼 予妹尼衆西輪寺長老申終入滅四十八歳(『満濟准后日記』 応永三十四年二月十三日条)。

「断簡に、西輪寺殿として記入あり」(『醍醐寺文書別集』一)。

春林周藤 藤西堂、相国寺長老として登場する人物(『満濟准后日記』)、自筆書狀断簡中に「静雲 周藤」

の自署が残る、満濟に近い人物と考えられ満濟弟の可能性が高い(『醍醐寺文書別集』2、鹿苑

僧録、寛正四年正月六日没。『相国寺史料』 思文閣出版、一九九七年)。

多いのも特徴的であり、それは次のように記されている。

女子号、白川殿 室町殿(源義満) 御台御方從一位(藤) 業子伺候 今小路一品室 從一(藤) 師冬卿室 権中

とある。また、彼女の父師法印源意は歌人と記されていることから、和歌会を通じてその娘が將軍御台に仕えるチャンスを得たのであろう。とにかく、満冬の母白川殿はこの家系中最高の出世頭であったかのような書き様である。実際、業子が義満室になるや、実家の日野家は固より、乳母・家人・番匠に至るまで奢ったという。業子伺候の白川殿の場合も同様であったことが想像される。

ところで、白川殿の夫従一位権大納言師冬卿は、『満済准后日記』応永二十年（一四一三）十月二十五日条に見える「故今小路一品第三廻」とある人物と思える。この記述により、満済三十六歳の時、兄師冬の三回忌の法要を行なったことが確認される。

満済自身は師冬について、父あるいは兄等とはまったく記していないが、『三宝院列祖次第（一）』には、満済について、「儀同三司今小路師冬公息、將軍義満公猶子」と明記されている。満済が初めて將軍義満に伺候した時には既に父は亡かった。そこで、実父基冬と出雲路殿の息とするより、師冬と白川殿の息としたほうが「権威」の面から考えて、より義満に近くなると考えた結果かもしれない。

また、『尊卑文脈』は、満冬と満済を兄弟として併記しているが、ここにある「満」の一字は、將軍義満からの偏諱と思われる。義満から一字拝領により満済とは、親子の関係を擬制し、満冬とは主従関係（兼參）を強化したものと考えられる。

「系図」に掲載している西輪寺尼と春林周藤は、満済の日記講読から得たものであるが、出雲路殿を母とする満済の弟妹と思われる。日記には、満済が母と妹を訪ねる様子も記され、人の情を感じさせる場面も残されている。これらは同じように母・妹を訪ねたとされる源信や弘法大師の挿話を思い出させる一面である。妹の尼は西輪寺長老になり、応永三十四年（一四二七）、兄満済に先立ち四十八歳で入滅しているが、生涯仏門で過ごした女性と推

測される。

弟の春林周藤（相国寺長老）は、禅僧、画家として知られるが、寛正四年（一四六三）正月六日没している。日記には、崇寿院、大智院、景嵩和尚、藤西堂等と記され登場するが、満濟実弟に比定して間違いないと思われる。日記の中で、弟周藤については、相国寺長老就任を喜ぶ記事が多い。永享二年（一四三〇）八月十日の相国寺入院に際し、公方（義教）の臨席があったのは弟のときが初めてと態々記している（同年八月十六日条）。満濟ほどの人物でも結構嬉しそである。いずれにしても、出雲路殿所生の子女は全員僧籍で、世俗の利害関係とは無縁であった。

2

中世儀礼社会において、武家の権力を朝廷内に及ぼすには、摂関家に伝わる有職故実を習得することが先決であった。義満は十歳で家督を継承し、武家の作法は細川頼之から、公家の作法は二条良基から学んだ。義満は、永和四年（一三七八）三月、二十一歳の時、権大納言に任ぜられ父祖の極官に達し、さらに、右近衛大将、右馬寮御監にもなっている。

ところで、このような官位昇進には就任披露の儀式（拜賀）をしなければならぬ慣わしがあった。

そこで良基への接近が必要不可欠になり、同年十月四日、三宝院（光濟僧正）で両者は初めて対面した⁸。以後義満は良基に公家の制度や文化を伝授され心酔していった。

さて、既述した如く、武家の棟梁義満の公家化を教授したのは公卿のトップ良基であり、結果において、武家の権力を朝廷内に進出させることになった。一見矛盾ともとれるこの二条良基の行動を如何に解釈すべきか。これを新興権力への追従ととるか、あるいはまた、他の摂関家に対する優越性を義満との縁によって再構築しようとしたととるべきか。

右のような見方は、単に二条家という家の立場のみ考えた場合である。実際、良基親子は権力者義満の近くにあつて、摂関の地位を三十年間にわたつて独占し続けたのである。

ここで、私見としては、良基の行動をもつと大きく歴史の中に位置付けたい。つまり、皇位継承における北朝の絶対化を実現させた一人と考えたい。

事実、武家が公家社会へ強力に介入し、実権を掌握したことにより、南北両朝の対立は、二つの皇統の争いという鎌倉以来続いた本来の意味を飛び越え、幕府対南朝勢力へと変化し、その抵抗に直面し難渋しているのは幕府なのである。

3

明徳三年（一三九二）閏十月二日、南北両朝の講和が成立した。

一方、この年の三月、細川頼之が没している。二条良基も嘉慶二年（一三八八）、すでに鬼籍に入っていた。長い間の懸案であつた南北両朝が統一された日、義満を作り上げた二人の指導者は世を去つていたことになる。義満にとって、この対立は父祖が残したものであつた。私は、義満を政治家として見た場合、最大の業績は南北両朝の合一にあると思つている。その講和の結果は（義満がどう思つていたかは別として）南朝側にとっては「怨入骨髄」の思いであつたろう。しかし、少なくとも制度上の和解がここに成立したのである。

他方、將軍義満のこの決断に注目すると、そこには、途轍もないエネルギーが投入され歴史が一步前進したことが看取される。南北両朝の和議は、武家の主導によつて実現し終焉したのである。この大事を実行できる精神力を持つてるのは、故実に精通し廷臣を従えた義満以外他にない。南北朝の動乱を未だ忘れてはいない当時の社会状況の中で、皇統への介入も辞さない義満の自信は良基によつて培われたものと思つ。それ故に、南北朝の合一、北朝絶

対化の実現を生み出した精神的原動力になったのが良基であったと評価したい。

嘉慶二年（一三八八）、六十九歳で前関白良基が薨じた年、義満は三十一歳になっていた。満濟（十一歳）はこの頃にはすでに義満寵童であったと推測される（幼名や児名はわかっていない）。

満濟は良基亡き後、二条家庶流出身の有能な児僧として武家の棟梁將軍に伺候し、義満の御猶子に選ばれた。この猶子拔擢は、まさしく義満の意志を継ぐ真の後継者たるものであった。東寺に残る応永十三年（一四〇六）九月十日「足利義満仏舍利奉請状」によると、満濟にもこの日、一粒奉請されたことがわかる。若き日の二人を知る好資料となっている。

本稿では、將軍義満と二条良基との関わりの中で、満濟がどのような絆で権力に結びついていったのかを考えてみた。

註

- 1 新田英治「黒衣の宰相 満濟」、『週刊朝日百科日本の歴史』十四、朝日新聞社、一九八六年。
- 2 『尊卑分脈』、『公卿補任』、『諸家傳』、『系図纂要』、『宮廷公家系図集覧』近藤敏喬編、東京堂出版、一九九九年。
- 3 年中行事歌会、四辻善成邸月次歌会等「二条良基年譜」（木藤才蔵『二条良基の研究』桜楓社、一九八七年所収）
- 4 『歴史地名辞典』六一九頁、平凡社、一九七九年、『京都の大路小路』三頁、小学館。
- 5 『尊卑分脈』一 九六頁、系図 今小路参照。
- 6 註（5）同書、二二 一八〇頁。
- 7 『続群』四下、五三三五頁。
- 8 『愚管記』永和四年十月四日条、後年満濟が義満推挙により同院門跡となった事実を思うと、賢俊僧正以来、醍醐寺三寶院が足利政権を支える拠点の一つとなっていたことは確かである。